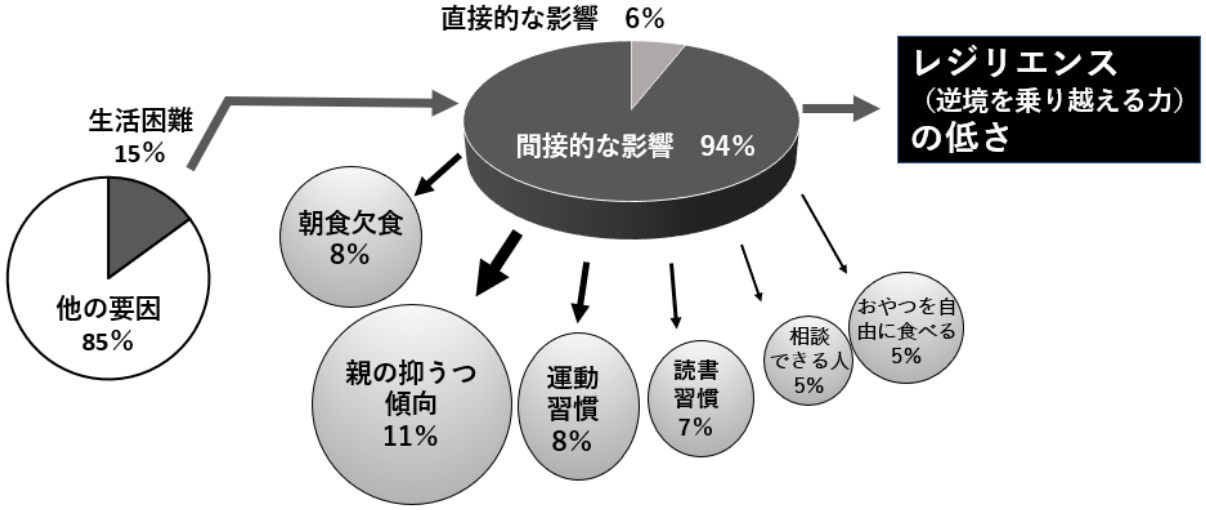
第３章　今後の対策に向けて

１　第１期（平成２７年度～令和５年度）の９年間で見えてきたこと

生活困難が子どものレジリエンス（逆境を乗り越える力）に与える影響のうち、子どもを取り巻く家庭環境や生活習慣などの「変えていくことが可能な」要因がもたらす影響（間接的な影響）がより大きいことが明らかになりました。９年間の調査結果の分析により、レジリエンスを高める可能性がある要素が示され、子どもを取り巻く家庭環境や生活習慣を変えていくことで子どものレジリエンスや健康に及ぼす貧困の影響を軽減し、連鎖を防ぐ可能性が見えてきました。

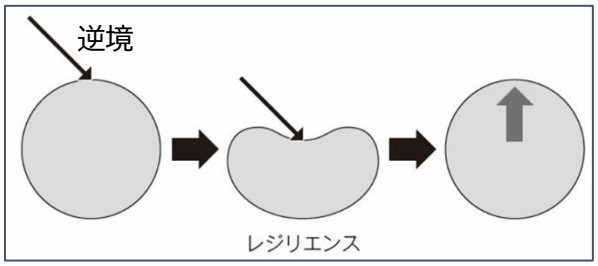


（１）レジリエンス（逆境を乗り越える力）の重要性

レジリエンスとは逆境を乗り越える力で、ストレスや困難な状況をしなやかに乗り越え、変化しながら元に戻ろうとする強さです。

レジリエンスが高いと子どもたちはトラブルや困難な場面に直面した際、すみやかに立ち直ることができます。

イメージ図



（２）子どものレジリエンスを高める要素

レジリエンスを高めるために統計上有意な要素として、以下の６点が浮かび上がりました。

ア　思いやりの気持ち

思いやりのある子どもは我慢することができ、他者のことを考えて行動するといったことがレジリエンスを育んでいると考えられます。

イ　挨拶ができる

挨拶は自己と他者との識別のスタートであり、挨拶を交わし合うことは互いを認め合うことに繋がります。

ウ　野菜から食べる

好きなものではなく「野菜から食べる」といった少しの我慢を実践できた自分への肯定感を高めることができます。

エ　ニュースを親子で話題にできる

「勉強をみる」「一緒に体を動かして遊ぶ」などの親子の関わりの中でも、レジリエンスに特に関係しやすいと考えられます。社会の中で起きている出来事を難しいながらも聞くことの我慢や、他者を認識する力が育まれると考えられます。

オ　ロールモデルを持っている

目標となる人や尊敬できる人との出会いによりモチベーションが上がり、困難に負けずに頑張ることができるようになります。

カ　親以外に自分のことを「見てくれている」と感じられる大人がまわりにいる

親以外に自分のことを「見てくれている」大人がいることが子どものアタッチメント（愛着）を補強し、周りの人を信頼でき助けを求めることができるようになることで、ストレスに対応することができます。

２　第２期（令和６年度～令和１３年度）の新たな調査項目

第２期の調査では、第１期の調査結果と比較するために継続する調査項目に加え、毎調査ごとに社会情勢や子どもを取り巻く環境の変化等に応じて新たに調査する内容を検討しています。これまでに、読み聞かせの実施、動画投稿サイトの視聴状況、子どもの主体性を広げる関わり等を質問項目に加えました。これらを東京科学大学が集計・分析して得た結果から明らかになったエッセンスを記載します。

（１）第２期の調査から新たに見えてきたこと

第２期で新たに加えた調査項目等とレジリエンスとの関連を分析することにより、次のような結果が得られました。

ア　０歳から読み聞かせを続けることが子どものレジリエンスの高さと関連する

令和６年度（小１）の調査において、０～７歳の各年齢について１週間に１回以上の読み聞かせを実施していたかどうかを調査したところ、０歳から開始して、かつなるべく長期間続けることが、小学１年生でのレジリエンスの高さと関連していました。

また、０歳から３年間続けた場合と、３歳から３年間続けた場合ではレジリエンスに有意な差はなく、開始時期が遅くなっても継続することが重要だと考えられます。

イ　スクリーンタイムは子どもとルールを決めて守らせることがレジリエンス形成に重要

今回の調査では、動画投稿サイトの視聴が１日あたり３時間を超える場合にレジリエンスの低下と有意に関連している結果となりました。長時間の視聴を避け、１日あたりの利用時間について家庭でルールを設けることが大切です。

また、動画投稿サイトやゲームの利用は、単に制限するのではなく、子どもと相談してルールを決めるなどの家庭内での合意形成や、継続的にルールを守らせるなどの一貫した関わりを通じて利用を調整することが、レジリエンス形成に重要である可能性が示唆されました。

ウ　子どもの主体性を育てることが子どものレジリエンスを培う

今回の調査で、子どもが自分で登校準備をする、宿題の管理をする、着る服を決めるなど、普段の生活で主体的に選択や自己管理を行っている場合にレジリエンスが高い傾向が見られました。また、子どもの主体性を支える関わりとして、特に、挑戦した結果の失敗なのであれば「否定せず見守る」「前向きな声掛けをする」「子どもの意見を尊重する」という姿勢は、レジリエンスとの関連が強いことがわかりました。

３　今後の対策に向けて

調査結果を踏まえ、子どもが安心して成長し、夢や希望に向かって挑戦できるよう以下の環境を整えていきます。家庭・学校・地域が一体となって、子どもの成長を支えていきましょう。

（１）本に触れる環境を整える

ア　読み語りは保護者が実施するものでなくても良い

読み語りは、保護者だけでなく近所の人や施設などで実施するものでも良く、また、無理のない範囲で「続けること」が重要です。

イ　足立区の取り組み

足立区では、読み語りの取り組みとして、乳幼児健診時に絵本をプレゼントする「あだちはじめてえほん事業」や、区内の子育てサロンや大型商業施設などで実施する絵本の読み語り事業「あだち絵本シアター」を開催しています。

ウ　今後の方針

第１期の調査では、「保護者に読書習慣があると子どもも本を読む」ことがわかっており、保護者へ本を読む楽しさや意義を感じられる機会をつくることも含め、引き続き、子どもの読書環境を整える取組を推進していきます。

（２）家庭・学校・地域で子どもの主体性や挑戦を支える

ア　子どもが自ら考え、責任を持って行動する機会を作る

動画投稿サイトの視聴時間など、家庭内のルールを子どもと保護者が一緒に決めることも含め、日常生活の中で子どもが自ら考え、判断し、責任を持って行動する機会を、家庭・学校・地域が連携して作っていくことが重要です。

イ　今後の方針

今後も、足立区では、地域や企業などとも連携しながら、家庭環境や経済状況に関わらず、子ども自身がやりたいことを考え、選択し、実践できるよう、多様な体験機会の創出を図っていきます。子どもの主体的な挑戦や意思決定を尊重し、安心して試行錯誤できる環境を整えることで、子どもの成長を支えていきます。

４　第２期の今後の調査について

（１）今後の予定

第２期（令和６年度～令和１３年度予定）は、同じ子どもたちの追跡調査を行っていくため、今後も、小学４年生、６年生、中学２年生の時に調査を実施し、これまでの施策等の効果を確認するとともに、コロナ禍がもたらした児童・生徒の生活習慣・学習習慣への影響も明らかにしていく予定です。

（２）子どもたちの健やかな成長のために

調査結果を踏まえ、子どもたちが将来の夢や希望を実現するレジリエンスを身につけるための施策を一層充実させてまいります。

紙面構成の都合により本ページ余白